

3年課程の看護学生のストレス対処能力(SOC)と 関連要因に基づく学習支援方法の検討

— 1年生と2年生の臨地実習前後の実態調査による量的分析より —

SENSE OF COHERENCE AND RELATED FACTORS EDUCING LEARNING SUPPORT METHOD IN 3-YEAR COURSE NURSING STUDENTS CONSIDERING STUDY SUPPORT METHOD

— A SURVEY OF FIRST AND SECOND GRADE STUDENTS BEFORE
AND AFTER CLINICAL PRACTICE —

高橋 由美¹⁾ ・ 及川 珠美²⁾ ・ 阿部 春美¹⁾ ・ 二口 尚美¹⁾ ・ 佐藤 理恵¹⁾
須藤千寿美¹⁾ ・ 伊藤茉莉子¹⁾ ・ 岡崎 優子¹⁾ ・ 齋藤ひろみ¹⁾

Yumi TAKAHASHI¹⁾ Tamami OIKAWA²⁾ Harumi ABE¹⁾ Hisami FUTAKUCHI¹⁾ Rie SATO¹⁾
Chizumi SUTO¹⁾ Mariko ITO¹⁾ Yuko OKAZAKI¹⁾ Hiromi SAITO¹⁾

キーワード：看護学生, ストレス対処能力 (SOC), 関連要因, 臨地実習

Key words : Nursing students, Sense of Coherence (SOC), related factors, Clinical practice

要 旨

本研究は、A短期大学の看護学科1年生と2年生の臨地実習前後のSOCと関連要因を把握し、SOCを高めるための学習支援の方向性を検討することを目的とした。1年生84名、2年生91名を対象とし、基礎看護学実習I、成人看護学実習Iの前後に自記式質問紙調査を実施し、SOCの変化と関連要因について分析した。その結果、1年生と2年生のSOC得点は臨地実習後に向上する傾向があった。1年生の入学後早期の臨地実習では、対人関係や職業志望動機がSOC得点に影響を及ぼしていた。2年生では、実習中の人間関係や相談できる人の存在がSOC得点に影響を及ぼしていた。1年生および2年生のSOCの低い学生に、「相談できる人」がなく、「ストレスコーピング」していない、さらに「コミュニケーションに対する不安」があり、「自分に対する好感度」が低いという特徴があることが明らかになった。看護学生のSOCを高めるためには、これらの特徴を踏まえ、入学当初からの段階的な学習支援方法を検討する必要性が示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to understand the Sense of Coherence (SOC) and related

1) 仙台青葉学院短期大学看護学科 2) 元仙台青葉学院短期大学看護学科
受理日：2020年1月31日

factors before and after clinical practice of first and second grade nursing students at A Junior College, and to explore the direction of learning support to enhance SOC. A self-administered questionnaire survey was conducted on 84 first-year students and 91 second-year students before and after Basic Nursing Practice I and Adult Nursing Practice I to analyze changes in SOC and related factors. As a result, the SOC scores of the first and second graders have tendency to raise after clinical practice. In early clinical training practice after enrollment, interpersonal relationships and motivation to work had an influence on SOC scores. In the second grade, the relationship between the students during training and the availability of consultants affected the SOC score. First and second grade students with low SOC have no “people who can consult”, do not “stress coping”, have “anxiety about communication”, and have low “favorableness to themselves” It was revealed. In order to improve the SOC of nursing students, it is suggested that it is necessary to consider step-by-step learning support methods from the beginning of admission, based on these characteristics.

I. 序論

看護短期大学における3年課程のカリキュラムでは最終学年の3年次に、多くの臨地実習科目が配置されている。加えて進学・就職活動や国家試験受験対策等の課題に取り組むことになり、最終学年の看護学生は、様々なストレスに耐えながら、看護専門職になる上での学習課題と向き合っている。

ストレス対処能力（Sense of Coherence、以下SOCとする）は困難を乗り越える力として、アントノフスキーによって提唱され¹⁾、わが国でも様々な分野で研究が行われるようになってきた^{2)~4)}。江上による看護学生のSOCと精神健康度との関係では⁵⁾、SOCの高い学生は低い学生と比較して精神健康度が高いことが報告されている。本江らによる3年課程の女子看護学生1～3年生のSOCと関連要因の検討では⁶⁾、ストレスコーピングと自分に対する好感度が有意な関連要因として報告され、さらに1年生では看護教育に対するストレス度、2年生では看護教育へのストレス度に加えて実習に対する不安度が有意な負の関連要因があり、3年生では看護職への欲求度と相談できる人の有無を有意な正の関連要因として認められたことを報告している。この他複数の先行研究からも^{7)~10)}、看護学生のSOCの発達形成につ

ながるサポート体制や教育環境の充実を図る重要性が報告されているが、具体的な支援方法はまだ確立されていない。蝦名は¹¹⁾ SOCを「生き抜く力」とし、思春期からの教員の関わりがこの力の成長に大きく影響することを示唆している。

以上のことにより、本研究の目的は、A短期大学の看護学科1年生と2年生の臨地実習前後のSOCと関連要因を把握し、SOCを高めるための学習支援の方向性を検討することとする。

II. 研究目的

3年課程の看護学生の1年生と2年生の臨地実習前後のSOCと関連要因を把握し、その状況を踏まえたうえで、SOCを高めるための学習支援の方向性を検討する。

III. 研究意義

3年課程の看護学生のSOCを高めるための学習支援方法を検討することにより、学生が様々なストレスに耐えて自己実現を目指し、心身の健康状態を保持しながら、看護専門職になる上での課題と向き合えるための学習支援方法の確立につながる可能性がある。

IV. 研究方法

1. A 短期大学看護学科1年生の基礎看護学実習 I 前後と2年生の成人看護学実習 I 前後の SOC と関連要因の実態を調査し、SOC を高めるための学習支援の方向性を検討した。

2. 研究の概念枠組み

本研究の目的は、SOC 概念を理論的基盤とする看護学生のストレス対処能力を高める学習支援方法の検討である。先行研究を参考に概念枠組みを考案した(図1)。本研究では、看護学生のストレス対処能力を高める学習支援方法の方向性を検討するために、看護学生の SOC (把握可能感、処理可能感、有意味感) と生活・学習環境に影響する要因の変化の実態を調査し、SOC とそれぞれの関連性を確認することとした。

3. 用語の定義

ストレス対処能力

本研究におけるストレス対処能力は、山崎ら²⁾のストレス対処能力(SOC)の定義を用い、把握可能感、処理可能感、有意味感から成るその人の生活全般への志向性とした。

把握可能感は、状況を把握し先を見通す感覚。処理可能感は、何とかかなると思える感覚。有意味感は自分の存在価値が分かり、ストレスに対処することに意味を見出す感覚である。

4. 研究対象

A 短期大学看護学科1年生84名、2年生91名を対象とした。

5. 研究期間

平成29年4月～平成30年3月

6. 調査方法

基礎看護学実習 I、成人看護学実習 I 前後に、自記式質問紙を使用し、実態を把握した。

7. 調査項目

- 1) 基本属性は年齢、社会人経験を把握した。
- 2) SOC 得点は山崎らが開発した日本語版 SOC13項目7件法 (range13-91点) を用いて把握した。
- 3) 看護学生の生活に影響する項目として、先行研究を参考に「看護の志望動機」、「趣味」、「理想の看護師像」、「課外活動」、「相談できる人」、「日々のストレス」についての有無を把握した。さらに「ストレスコーピング」、「経済的満足度」、「主観的健康観」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「看護教育による自己成長度」、「看護教育に対するストレス度」、「進路に対する不安」、「国家試験に対する不安」、「実習による成長への期待」、「実習に対する不安」、「コミュニケーションに対する不安」、「友人関係」、「家族関係」に

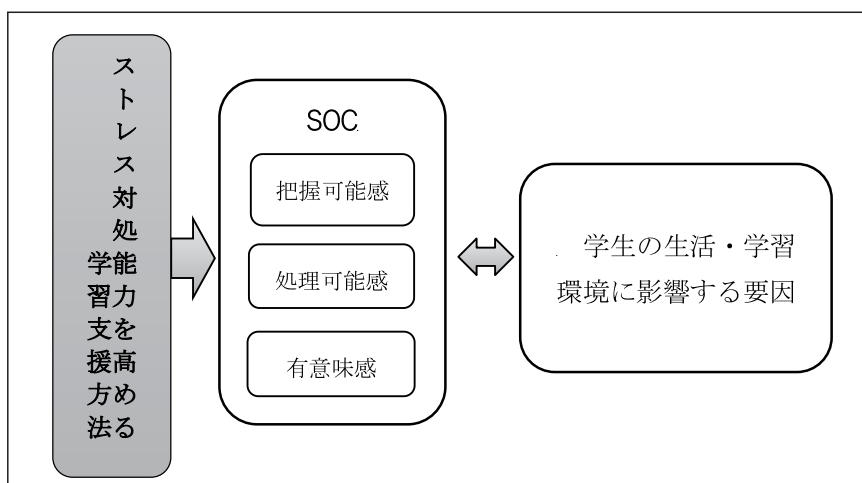


図1 研究の概念枠組み

ついて、「まったくない」～「とてもある」、「とても悪い」～「とても良い」等の5段階評価で把握した。

8. 分析方法

- 1) 統計解析には、IBM SPSS Statistics 24.0を使用した。
- 2) SOC 尺度得点の実習前後の変化や各変数との関連性を対応のある t 検定および Spearman の相関係数により確認した。
- 3) 臨地実習前後の SOC 得点の変化の分析は、SOC 得点の中央値を基準に「高群」「低群」とし、「高高群」「高低群」「低高群」「低低群」の4パターンと各変数との関連をクロス集計および χ^2 検定により確認した。

9. 倫理的配慮

A 短期大学研究倫理審査委員会の承認 (2903) を得て実施した。対象者には文章と口頭で研究目的、方法、協力の任意性と拒否や撤回の自由、断っても成績評価等一切不利益が無いこと、個人情報保護、ID 番号化による匿名性の保証について説明し、質問紙への回答をもって同意とみなした。

V. 結果

1. 看護学科1年生の実態調査

平成29年度の基礎看護学実習 I は平成29年7月中旬の5日間で、オリエンテーションは7月上旬に行われた。実習前調査は、平成29年6月下旬に実施し、84名の学生に自記式質問紙を配布して、74名より回答を得た (回収率88.1%)。実習後調査は、7月下旬に実施し、84名の学生に自記式質問紙を配布して、77名より回答を得た (回収率91.7%)。

本調査では、実習前後の調査に回答し、SOC13項目における欠損値を除いた71名のデータを分析対象とした。

1) 基本属性

対象者の平均年齢は19.3 (SD±3.6) 歳で、社会人経験者は7名であった。

2) SOC 得点の実習前後の変化 (表1)

SOC 得点は、実習前の平均が54.5 (SD±10.1) 点、実習後が55.8 (SD±9.3) 点で統計上の有意差はないものの ($p = .05$) 得点は向上した。

3) SOC 得点と各変数の関連性 (表2)

実習前の SOC 得点と各変数の相関関係で、実施前の「ストレスコーピング」、「経済的満足度」、「主観的健康観」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「実習による成長への期待」の高さと、「友人関係」や「家族関係」の良好さに有意な正の相関があった。「進路に対する不安」や「実習に対する不安」、「コミュニケーションに対する不安」に負の相関があった。

実習後の SOC 得点と各変数の相関関係では、実習後の「主観的健康観」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「看護教育による自己成長度」の高さ、「友人関係」や「家族関係」の良好さに有意な正の相関があった。続いて「経済的満足度」、「実習による成長への期待」の高さに正の相関があった。また「進路に対する不安」や「コミュニケーションに対する不安」の有無に有意な負の相関があり、続いて「看護教育に対するストレス」や「国家試験に対する不安」の有無に負の相関があった。

実習前後の SOC 得点と「志望動機」、「趣味」、「理想の看護師像」、「課外活動」、「相談できる人」、「日々のストレス」の有無について t 検定を行った (表3)。

実習前の SOC と「志望動機」の有無 ($p = .04$)、「相談できる人」の有無 ($p = .02$)、「日々のストレス」の有無 ($p = .01$) に有意な差があった。実習後は、「相談できる人」の有無 ($p = .01$)、「日々のストレス」の有無 ($p < .01$) に有意な差があった。

2. 看護学科2年生の実態調査

平成29年度の成人看護学実習 I は平成29年8月

表1 1年生の実習前後のSOC得点の変化 (N=71)

	実習前		実習後		p 値
	平均	SD	平均	SD	
SOC 合計得点	54.5	10.1	55.8	9.3	.05
把握可能感 (Co)	19.2	4.9	20.1	4.6	.05
処理可能感 (Ma)	17.6	3.1	18.0	3.1	.69
有意味感 (Me)	17.6	4.2	18.0	4.1	.20

t検定 *p<.05

表2 1年生のSOC得点と各項目の相関関係 (N=71)

項 目	実習前		実習後	
	r	p 値	r	p 値
ストレスコーピング (全くしていない<とてもしている)	.340	.004 **	.171	.153
経済的満足度 (とても不満<とても満足)	.322	.006 **	.280	.018 *
主観的健康感 (とても悪い<とても良い)	.482	p<.001 **	.361	.002 **
自分に対する好感度 (とても嫌い<とても好き)	.432	p<.001 **	.403	p<.001 **
看護職への欲求度 (まったくない<とてもある)	.306	.009 **	.405	p<.001 **
看護教育による自己成長度 (まったく思わない<とても思う)	.197	.099	.388	.001 **
看護教育に対するストレス度 (まったくない<とてもある)	-.230	.053	-.250	.036 *
進路に対する不安 (まったくない<とてもある)	-.256	.031 *	-.352	.003 **
国家試験に対する不安 (まったくない<とてもある)	.231	.053	-.278	.019 *
実習による成長への期待 (まったくない<とてもある)	.359	.002 **	.269	.023 *
実習に対する不安 (まったくない<とてもある)	-.283	.017 *	-.140	.243
コミュニケーションに対する不安 (まったくない<とてもある)	-.237	.046 *	-.321	.006 **
友人関係 (とても悪い<とても良い)	.420	p<.001 **	.376	.001 **
家族関係 (とても悪い<とても良い)	.328	.006 **	.333	.005 **

Spearman の相関係数 ** . p<.01 *.p<.05

表3 1年生のSOC得点と各項目による比較 (N=71)

項 目	実習前					実習後				
	n	平均	±	SD	p 値	n	平均	±	SD	p 値
看護の志望動機 注 ¹⁾										
あり	65	55.23	±	9.61	.04 *	67	56.22	±	9.30	.16
なし	3	43.00	±	14.11		4	49.50	±	6.40	
趣味										
あり	59	55.29	±	10.56	.13	59	56.19	±	9.31	.50
なし	12	50.42	±	5.92		12	54.17	±	9.23	
理想の看護師像										
あり	63	55.17	±	9.83	.10	62	55.97	±	8.94	.77
なし	8	48.88	±	10.86		9	55.00	±	11.87	
課外活動										
あり	50	54.50	±	10.90	.96	49	56.82	±	9.58	.19
なし	21	54.38	±	7.99		22	53.68	±	8.31	
相談できる人										
いる	60	55.68	±	9.58	.02 *	62	56.97	±	8.87	.01 *
いない	11	47.82	±	10.51		9	48.11	±	8.64	
日々のストレス										
ある	59	52.68	±	8.64	p<.01 **	54	53.04	±	7.12	p<.01 **
ない	12	63.25	±	12.24		17	64.76	±	9.83	

t検定 ** . p<.01 *.p<.05

注¹⁾ : 無回答を除いたn数

～9月の期間中、3週間の日程で行われた。実習前調査は7月下旬に実施し、91名の学生に自記式質問紙を配布して、84名より回答を得た（回収率92.3%）。実習後調査は、10月上旬に実施し、91名の学生に自記式質問紙を配布して、89名より回答を得た（回収率97.8%）。本調査では、実習前後の調査に回答し、SOC13項目における欠損値を除いた79名のデータを分析対象とした。

1) 基本属性

対象者の平均年齢は20.0 (SD±2.7) 歳で、社会人経験者は4名であった。

2) SOC 得点の実習前後の変化 (表4)

SOC 得点は、実習前の平均が54.8 (SD±8.1) 点、実習後が55.8 (SD±7.8) 点で、有意な差は無かった ($p = .16$) が、実習後に向上する傾向があった。

3) SOC 得点と各変数の関連性 (表5)

実習前の SOC 得点と各変数の相関関係では、実施前の「主観的健康観」と「家族関係」の良好さに有意な正の相関があった。続いて「経済的満足度」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「実習による成長への期待」の高さに正の相関があった。また、「看護教育に対するストレス」や「進路に対する不安」の有無に有意な負の相関があり、「国家試験に対する不安」や「コミュニケーションに対する不安」の有無に負の相関があった。

実習後の SOC 得点と各変数の相関関係では、実習後の「ストレスコーピング」、「主観的健康観」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「実習による成長への期待」の高さ、「友人関係」や「家族関係」の良好さに有意な正の相関があった。続いて「経済的満足度」、「看護教育による自己成長度」の高さ、「家族関係」の良好さに正の相関があった。また、「進路に対する不安」や「実習に対する不安」、「コミュニケーションに対する不安」の有無に有意な負の相関があった。

実習前後の SOC 得点と「志望動機」、「趣

味」、「理想の看護師像」、「課外活動」、「相談できる人」、「日々のストレス」の有無について t 検定を行った (表6)。

実習前の SOC 得点と、「相談できる人」の有無 ($p < .01$)、「日々のストレス」の有無 ($p = .04$) に有意な差があった。実習後は、「趣味」の有無 ($p = .02$)、「課外活動」の有無 ($p = .04$)、「相談できる人」の有無 ($p < .01$)、に有意な差があった。

3. 看護学科1年生と2年生の臨地実習前後の SOC の変化と関連要因の分析結果

1年生と2年生の臨地実習前後の SOC 得点の変化の分析は、SOC 得点の中央値を基準に「高群」「低群」とし、「高高群」「高低群」「低高群」「低低群」の4パターンと各変数との関連を確認した。各変数は「ある」「どちらともいえない」「ない」に分類し Pearson の χ^2 検定を行った。

1) 1年生の分析結果 (表7)

基礎看護学実習 I 前後の SOC 得点の変化群の人数は、「高高群」24名 (33.8%)、「高低群」9名 (12.7%)、「低高群」11名 (15.5%)、「低低群」27名 (38.0%) であった。クロス表の検討では「低低群」に、①「志望動機」がない：実習前2名 (2.9%) 実習後3名 (4.2%)、②「相談できる人」がない：実習前7名 (9.9%) 実習後5名 (7.0%)、③「日々のストレス」がある：実習前24名 (33.8%) 実習後25名 (35.2%)、④「ストレスコーピング」をしていない：実習前11名 (15.5%) 実習後8名 (11.3%)、⑤「コミュニケーションに対する不安」がある：実習前21名 (29.6%) 実習後22名 (32.4%)、⑥「自分に対する好感度」嫌い：実習前16名 (16.0%) 実習後16名 (16.0%) と回答した学生が他の群と比較して多かった。「日々のストレス」がある：実習後 ($p = .01$)、「コミュニケーションに対する不安」：実習後 ($p = .04$)、「自分に対する好感度」実習前 ($p = .01$) 実習後 ($p < .01$) に有意な差が

表4 2年生の実習前後のSOC得点の変化 (N=79)

	実習前		実習後		p 値
	平均	SD	平均	SD	
SOC 合計得点	54.8	8.1	55.8	7.8	.16
把握可能感 (Co)	19.5	4.5	19.6	4.3	.72
処理可能感 (Ma)	18.1	2.7	18.6	2.4	.19
有意味感 (Me)	17.2	3.4	17.6	3.6	.11

t検定 *p<.05

表5 2年生のSOC得点と各項目の相関関係 (N=79)

項 目	実習前		実習後	
	r	p 値	r	p 値
ストレスコーピング (全くしていない<とてもしている)	.111	.332	.442	p<.001 **
経済的満足度 (とても不満<とても満足)	.234	.038 *	.225	.046 *
主観的健康感 (とても悪い<とても良い)	.342	.002 **	.344	.002 **
自分に対する好感度 (とても嫌い<とても好き)	.264	.019 *	.475	p<.001 **
看護職への欲求度 (まったくない<とてもある)	.222	.049 *	.385	p<.001 **
看護教育による自己成長度 (まったく思わない<とても思う)	.192	.090	.288	.010 *
看護教育に対するストレス度 (まったくない<とてもある)	-.299	.007 **	-.317	.004 **
進路に対する不安 (まったくない<とてもある)	-.318	.004 **	-.427	p<.001 **
国家試験に対する不安 (まったくない<とてもある)	-.227	.044 *	-.125	.271
実習による成長への期待 (まったくない<とてもある)	.282	.012 *	.315	.005 **
実習に対する不安 (まったくない<とてもある)	-.020	.860	-.331	.003 **
コミュニケーションに対する不安 (まったくない<とてもある)	-.234	.038 *	-.450	p<.001 **
友人関係 (とても悪い<とても良い)	.173	.128	.327	.003 **
家族関係 (とても悪い<とても良い)	.354	.001 **	.265	.018 *

Spearman の相関係数 ** .p<.01 *.p<.05

表6 2年生のSOC得点と各項目による比較 (N=79)

項 目	実習前					実習後				
	n	平均	±	SD	p 値	n	平均	±	SD	p 値
看護の志望動機 注 ²⁾										
あり	73	54.88	±	8.33	.90	70	56.51	±	7.12	.23
なし	5	54.40	±	6.19		8	50.88	±	11.92	
趣味										
あり	68	55.31	±	8.08	.16	62	56.89	±	7.83	.02 *
なし	11	51.55	±	8.19		17	52.06	±	6.69	
理想の看護師像										
あり	66	55.32	±	8.05	.19	68	56.13	±	8.03	.62
なし	13	52.08	±	8.41		10	54.80	±	6.23	
課外活動										
あり	60	55.75	±	8.24	.06	66	56.67	±	7.83	.04 *
なし	19	51.74	±	7.23		13	51.69	±	6.69	
相談できる人										
いる	74	55.49	±	7.73	p<.01 **	72	56.72	±	7.26	p<.01 **
いない	5	44.40	±	7.83		7	46.86	±	8.11	
日々のストレス										
ある	70	54.11	±	7.69	.04 *	67	55.16	±	7.93	.07
ない	9	60.00	±	10.16		12	59.67	±	6.12	
成人実習 I										
前期						22	55.59	±	6.39	.86
後期						57	55.95	±	8.35	

t検定 ** .p<.01 *.p<.05

注²⁾ : 無回答を除いたn数

表7 1年生のSOC変化群の特徴

(N=71)

	低低群 n=27	低高群 n=11	高低群 n=9	高高群 n=24	p 値
実習前 看護の志望動機 注 ³⁾					
あり	23 (33.8)	11 (16.2)	8 (11.8)	23 (33.8)	.35
なし	2 (2.9)	0 (0.0)	1 (1.5)	0 (0.0)	
実習後 看護の志望動機					
あり	24 (33.8)	11 (15.5)	9 (12.7)	23 (32.4)	.42
なし	3 (4.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.4)	
実習前 相談できる人					
いる	20 (28.2)	9 (12.7)	8 (11.3)	23 (32.4)	.19
いない	7 (9.9)	2 (2.8)	1 (1.0)	1 (1.4)	
実習後 相談できる人					
いる	22 (31.0)	9 (12.7)	8 (11.3)	23 (32.4)	.44
いない	5 (7.0)	2 (2.8)	1 (1.4)	1 (1.4)	
実習前 日々のストレス					
ある	24 (33.8)	10 (14.1)	9 (12.7)	16 (22.5)	.06
なし	3 (4.2)	1 (1.4)	0 (0.0)	8 (11.3)	
実習後 日々のストレス					
ある	25 (35.2)	9 (12.7)	7 (9.9)	13 (18.3)	.01*
なし	2 (2.8)	2 (2.8)	2 (2.0)	11 (15.5)	
実習前 ストレスコーピング					
していない	11 (15.5)	1 (1.4)	4 (5.6)	2 (2.8)	.08
している	8 (11.3)	5 (7.0)	3 (4.2)	14 (19.7)	
どちらともいえない	8 (11.3)	5 (7.0)	2 (2.8)	8 (11.3)	
実習後 ストレスコーピング					
していない	8 (11.3)	1 (1.4)	2 (2.8)	4 (5.6)	.66
している	12 (16.9)	8 (11.3)	4 (5.6)	15 (21.1)	
どちらともいえない	7 (9.9)	2 (2.8)	3 (4.2)	5 (7.0)	
実習前 コミュニケーションに対する不安					
ある	21 (29.6)	8 (11.3)	4 (5.6)	13 (18.3)	.16
ない	6 (8.5)	3 (4.2)	5 (7.0)	11 (15.5)	
実習後 コミュニケーションに対する不安					
ある	22 (31.0)	9 (12.7)	6 (8.5)	11 (15.5)	.04*
ない	5 (7.0)	2 (2.8)	3 (4.2)	13 (18.3)	
実習前 自分に対する好感度					
嫌い	16 (22.5)	4 (5.6)	5 (7.0)	2 (2.8)	.01*
好き	4 (5.6)	3 (4.2)	1 (1.4)	10 (14.1)	
どちらともいえない	7 (9.9)	4 (5.6)	3 (4.2)	12 (16.9)	
実習後 自分に対する好感度					
嫌い	16 (22.5)	4 (5.6)	2 (2.8)	0 (0.0)	p<.01**
好き	5 (7.0)	2 (2.8)	1 (1.4)	10 (14.1)	
どちらともいえない	6 (8.5)	5 (7.0)	6 (8.5)	14 (19.7)	

Pearsonの χ^2 検定 **. p<.01 *.p<.05注³⁾ 無回答を除いたn数

()内は%

表8 2年生のSOC変化群の特徴

(N=79)

	低低群 n=35	低高群 n=8	高低群 n=4	高高群 n=32	p 値
実習前 看護の志望動機 注 ⁴⁾					
あり	31 (39.7)	8 (10.3)	4 (5.1)	30 (38.5)	.76
なし	3 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.6)	
実習後 看護の志望動機					
あり	29 (37.2)	8 (10.3)	4 (5.1)	29 (37.2)	.54
なし	5 (6.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (3.8)	
実習前 相談できる人					
いる	30 (38.0)	8 (10.1)	4 (5.1)	32 (40.5)	.08
いない	5 (6.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
実習後 相談できる人					
いる	29 (36.7)	8 (10.1)	4 (5.1)	31 (39.2)	.14
いない	6 (7.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)	
実習前 日々のストレス					
ある	33 (41.8)	7 (8.9)	3 (3.8)	27 (34.2)	.49
なし	2 (2.5)	1 (1.3)	1 (1.3)	5 (6.3)	
実習後 日々のストレス					
ある	34 (43.0)	7 (8.9)	2 (2.5)	24 (30.4)	.02*
なし	1 (1.3)	1 (1.3)	2 (2.5)	8 (10.1)	
実習前 ストレスコーピング					
していない	6 (7.6)	2 (2.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	.09
している	15 (19.0)	4 (5.1)	2 (2.5)	23 (29.1)	
どちらともいえない	14 (17.7)	2 (2.5)	2 (2.5)	9 (11.4)	
実習後 ストレスコーピング					
していない	7 (8.9)	1 (1.3)	1 (1.3)	1 (1.3)	.05
している	13 (16.5)	5 (6.3)	2 (2.5)	25 (31.6)	
どちらともいえない	15 (19.0)	2 (2.5)	1 (1.3)	6 (7.6)	
実習前 コミュニケーションに対する不安					
ある	30 (38.0)	6 (7.6)	2 (2.5)	20 (25.3)	.12
ない	5 (6.3)	2 (2.5)	2 (2.5)	12 (15.2)	
実習後 コミュニケーションに対する不安					
ある	30 (38.0)	5 (6.3)	3 (3.8)	23 (29.1)	.40
ない	5 (6.3)	3 (3.8)	1 (1.3)	9 (11.4)	
実習前 自分に対する好感度					
嫌い	26 (32.9)	1 (1.3)	2 (2.5)	18 (22.8)	.01*
好き	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
どちらともいえない	9 (11.4)	7 (8.9)	2 (2.5)	14 (17.7)	
実習後 自分に対する好感度					
嫌い	17 (21.5)	1 (1.3)	1 (1.3)	6 (7.6)	p<.01**
好き	1 (1.3)	0 (0.0)	2 (2.5)	12 (15.2)	
どちらともいえない	17 (21.5)	7 (8.9)	1 (1.3)	14 (17.7)	

Pearsonの χ^2 検定 **、p<.01 *、p<.05注⁴⁾ 無回答を除いたn数

()内は%

あった。

2) 2年生の分析結果(表8)

成人看護学実習 I 前後の SOC 得点の変化群の人数は、「高高群」32名(40.5%)、「高低群」4名(5.1%)、「低高群」8名(10.1%)、「低低群」35名(44.3%)であった。クロス表の検討では「低低群」に、①「相談できる人」がない：実習前5名(6.3%)実習後6名(7.6%)、②「日々のストレス」がある：実習前33名(41.8%)実習後34名(43.0%)、③「ストレスコーピング」をしていない：実習前6名(7.6%)実習後7名(8.9%)と回答した学生が他の群と比較して多かった。④「コミュニケーションに対する不安」がある：実習前30名(38.0%)実習後30名(38.0%)、⑤「自分に対する好感度」嫌い：実習前26名(32.9%)、実習後17名(21.5%)であった。「日々のストレス」がある：実習後($p = .02$)、「自分に対する好感度」実習前($p = .01$)実習後($p < .01$)に有意な差があった。

VI. 考察

1. 看護学科1年生の臨地実習前後の SOC 得点と各変数との関連性

臨地実習前後の SOC 得点の変化に有意差は無かったが、実習後に SOC 得点の平均が向上する傾向があった。

SOC 得点の関連要因としては、実習前の「志望動機」および実習前後を通して「主観的健康観」、「自分に対する好感度」、「看護職への欲求度」、「友人関係」、「家族関係」との強い相関があった。本研究は1学年前期の6～7月に実施しており、学生にとっては入学に伴う人間関係や経済状況も含めた環境の変化への適応が求められる時期でもある。うつやストレス、職業志望動機の強さは SOC 得点に影響する^{5) 9)}と言われており、対人関係や環境の変化に対する心身の適応、明確な志望動機を持ち入学しているかどうかということが、今回の調査結果に影響を及ぼしている可能性が示

唆された。「志望動機」については、実習後は有意差がないため、実習中の体験が「志望動機」と SOC に及ぼす影響について把握していく必要性がある。

本江ら⁶⁾は、SOC 得点と「ストレスコーピング」、「自分に対する好感度」を有意な正の関連要因、「看護教育に対するストレス」を有意な負の関連要因と報告している。本研究ではさらに「コミュニケーションに対する不安」や「進路に対する不安」、「国家試験に対する不安」が有意な負の関連要因として認められた。初めての臨地実習で、教員や指導者の助言を受けながら患者とコミュニケーションを取ることや、看護援助の実際を見学することにより、どうすればよいかわかる把握可能感が高まり、つづいてどうすればできるかが分かる処理可能感や看護師を目指そうとしている自分自身の有意味感へとつながった可能性がある。また、実習前後の SOC 得点と「日々のストレス」や「相談できる人」の有無に有意差が認められた。さらに臨地実習後の SOC 得点の変化と SOC の低い学生の要因について、把握する必要がある。

また、樫野ら¹⁰⁾は、実習前の SOC の値が高い学生でも、看護過程に対処できなかった場合は実習後に SOC の低下を経験しており、看護過程を展開するための実習記録にストレスを感じることも SOC の低下に関連していたと報告している。今後、看護過程を展開する臨地実習においても継続的に実態を調査し、SOC の低下に関連する要因についてさらに把握する必要がある。

2. 看護学科2年生の臨地実習前後の SOC 得点と各変数との関連性

SOC 得点の変化に有意差は無かったが、実習後に SOC 得点の平均は向上する傾向があった。本江ら⁶⁾は、SOC 得点と「看護教育に対するストレス度」や「実習に対する不安度」を有意な負の相関要因、また「自分に対する好感度」や「友人関係」を有意な正の関連要因であったと報告している。実習中のグループダイナミクスや「友人関係」の良好さ、教員や指導者等の「相談できる

人」の存在により、実習へのストレスや不安に対処でき、「自分に対する好感度」が上がりさらにSOCの向上につながる可能性がある。また、本研究では有意な負の関連要因として「コミュニケーションに対する不安」があることが認められた。学生が患者とのコミュニケーションや看護過程の展開等の学習課題に前向きに取り組み、自己効力感を高められるような学習支援を行うことでSOCが向上する可能性が示唆された。一方、SOCの低い学生は相談できる環境が整っておらず、実習や「コミュニケーションに対する不安」を抱え、「自分に対する好感度」が低いまま実習を終えた可能性がある。さらに臨地実習後のSOCの変化と各変数との関連を捉えた上で学習支援の方向性を検討する必要がある。

3. 看護学科1年生と2年生のSOC変化群と各変数との関連性

1年生と2年生の臨地実習前後のSOC得点と各変数との関連性を把握した結果、SOCの低い学生は「相談できる人」や環境が整っておらず、実習や「コミュニケーションに対する不安」を抱え、「自分に対する好感度」が低いまま経過する可能性が仮説としてあげられた。そのため、さらに臨地実習後のSOC得点の変化とSOCの低い学生の要因を把握し、その状況を踏まえたうえで学習支援の方向性を検討することとした。

SOC変化群を、「高高群」「高低群」「低高群」「低低群」の4パターンとし各変数との関連を分析したところ、1年生と2年生のSOC「低低群」に共通して、実習後の「日々のストレス」があり、実習前後の「自分に対する好感度」が低いという関連要因があった。また、「ストレスコーピング」していない、「相談できる人」がいない、「コミュニケーションに対する不安」が多い傾向があり、1年生では実習後に有意な差を示した。本研究におけるSOCの低い学生の要因に関する仮説を概ね支持しており、入学当初からSOCが低く変化しなかった学生は、看護職への期待を持たず、実習を通しての人との関わりやコミュニケーション

への苦手意識を持ち、ストレスに対処できないまま最終学年に向かう可能性が示唆された。SOCの低い学生の特徴を捉え、入学時より段階的に学習支援を行い、コミュニケーションやチームワーク等の社会人基礎力を身につけながら、学習課題に向き合うことを支援する必要がある。先行研究では¹⁰⁾看護過程展開への不安が有意に関連していた報告があり、基礎看護学実習Ⅱの状況を引き続き把握しながら、具体的な支援方法を検討する必要がある。2年生では実習後に「自分に対する好感度」が上がった学生もいたことから、相談できる環境を整え、看護過程の展開等を通して自己効力感を得られるような支援を行うことでSOCが向上し、「自分に対する好感度」が上がる可能性が示唆された。

4. 看護学生のSOCを高める学習支援の方向性

1年生と2年生のSOCの低い学生の特徴を踏まえ、入学時より段階的に支援を行い、コミュニケーションやチームワーク等の社会人基礎力を身につけながらSOCを高め、看護過程の展開等を含めた学習課題に取り組み、自分に対する好感度を上げて最終学年を迎えられるような学習支援方法を検討する必要がある。SOCを高める介入プログラムでは^{12) 13)}、グループでのトークセラピーや運動、物づくりを通じた参加者間の相互作用による気づき合いが、SOCの向上に関連していることが報告されている。また蛭名は¹¹⁾、SOCを育む3つの「良質な経験」として、一貫性のある経験が把握可能感を高め、適度なストレスが処理可能感を高め、さらに結果形成に参加する経験が有意味感を高めると述べている。A看護短期大学のカリキュラムには社会人基礎力を身につけるための1年次「大学生活論」や段階的に問題解決力やクリティカルシンキングを身につけるための1年次「課題探究ゼミナールⅠ」2年次「課題探究ゼミナールⅡ」が配当されている。現有のカリキュラムや年間行事、課外活動等に、SOCを高められるようなプログラムや関わりの方法を取り入れることにより、初年次から段階的かつ効果的に支

援できる可能性がある。また、チューター制度により担当教員が少人数の学生をサポートする体制がある。入学当初から相談できる人やコミュニケーションに対する不安、対人関係、職業志望動機等を把握し、学生自身が段階的にSOCを育めるよう継続的に支援することが可能である。取り分けSOCの低い学生がコミュニケーションや人との関わりを通し、自己効力感を高められるような臨地実習時の学習支援方法を確認し、関わる教員が連携・協働して支援することにより、学生のSOCが高められる可能性がある。

戸ヶ里¹⁴⁾による高校生の10ヶ月間の変化パターンとその要因に関する研究では、SOC低値維持群の要因として、友人関係をうまく構築できない状況で、学業や部活等でも「良質な経験」が十分できていないことが報告されている。本研究におけるSOCの低い学生の特徴はその傾向を支持するものであり、「相談できる人」がなく、「日々のストレス」に対応できず、「コミュニケーションに対する不安」があり人間関係が構築できない状況を打破し、臨地実習等での「良質な経験」から自己効力感や「自分に対する好感度」を高められる機会教育が必要である。そのためには、学生と教員が双方向で課題解決に向かえるような学習支援方法が望ましい。入学時より段階的に目標を設定し、3年間のポートフォリオ等により学生が主体的に取り組めるような教材を開発し、教員もSOCを育む「良質な経験」に着眼しながら学習を支援していく必要性が示唆された。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究は、A短期大学看護学科の1年生と2年生を対象にした一時期の実態調査に基づくものであることから、学習支援方法の汎用化には限界がある。今後、縦断的横断的に調査を継続し、その状況を踏まえたうえで、看護学生のSOCを高めるための段階を追った学習支援方法を確認していくことが課題である。

VII. 結 論

1年生と2年生のSOC得点は、臨地実習後に向上する傾向があった。1年生の入学後早期の基礎看護学実習Iでは、対人関係や職業志望動機がSOC得点に影響を及ぼしていた。2年生では、実習中の人間関係や相談できる人の存在がSOC得点に影響を及ぼしていた。1年生および2年生のSOCの低い学生に、「相談できる人」がなく、「ストレスコーピング」していない、さらに「コミュニケーションに対する不安」があり、「自分に対する好感度」が低いという特徴があることが明らかになった。今後、縦断的横断的に調査を継続し、その状況を踏まえたうえで、看護学生のSOCを高めるための段階を追った学習支援方法を確認し、教材化を図る必要性が示唆された。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、ご協力をいただいたみなさまに心より感謝いたします。

尚、本研究は平成29年度仙台青葉学院短期大学学長裁量研究費（課題番号2901）の助成を受け、その一部を第21回北日本看護学会学術集会で報告した。

文 献

1. Antonovsky Aaron: Health, Stress, and Coping: New perspectives on Mental and Physical Well-Being. Jossey-Bass Publishers, 1979, San Francisco.
2. 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典, 坂野純子(編): ストレス対処能力SOC.有信堂高文社, 東京, 2008, 172-174.
3. 近藤克則編: 検証「健康格差社会」介護予防に向けた社会疫学的大規模調査,医学書院,東京, 2007
4. 高橋由美: 仮設住宅に暮らす高齢者が抱えている問題,看護展望.2015; 4: 27-33.
5. 江上千代美: 看護学生の首尾一貫感覚と精神健康度との関係,心身健康科学, 2008; 4: 44-

- 48.
6. 本江朝美, 川口毅, 谷山牧, 他: 女子看護学生の Sense of Coherence とその関連要因の検討, 昭和大学保健医療学雑誌, 2005; 65: 365-373.
7. 高島尚美, 大江真琴, 五木田和枝, 他: 成人看護学臨地実習における看護学生のストレス縦断的变化ー心理的ストレス指標と生理的ストレス指標からー. 日本看護研究学会雑誌. 2010; 33: 115-121.
8. 本江朝美, 高橋ゆかり, 古市清美: 看護学生の Sense of Coherence と自己および他者に対する意との関連. 上武大学看護学部紀要. 2011; 6: 1-8.
9. 大島和子, 福島和代: 看護大学生の職業志望動機とストレス. 心身健康科学. 2017; 13: 62-71.
10. 樫野香苗, 金子さゆり: 基礎看護学実習における看護学生の SOC 変化とそれに影響するストレス要因. 名古屋市立大学看護学部紀要. 2016; 15: 15-21.
11. 蝦名玲子: 生き抜く力の育て方-逆境を成長につなげるために-. 大修館書店, 東京, 2016
12. Langeland E1, Riise T, Hanestad BR, Nortvedt MW, Kristoffersen K, Wahl AK.: The effect of salutogenic treatment principles on coping with mental health problems A randomized controlled trial. Patient Education and Counseling; : 62(2):212-219.
13. 高橋由美, 高橋和子, 武田淳子, 他: 災害復興期の仮設住宅に暮らす高齢者のストレス対処能力を高めるプログラム開発ー. 日本災害看護学会誌. 2018; 20: 24-36.
14. 戸ヶ里泰典, 小手森麗華, 山崎喜比呂, 他: 高校生における Sense of Coherence (SOC) の関連要因の検討ー小・中・高の学校生活各側面の回顧的評価と SOC の10ヶ月間の変化パターンとの関連性. 日本健康教育学会誌. 2009; 17: 71-86.